

現代の家族状況から見る子どもの社会情緒的発達

本島 優子・石井 佑可子・川崎 裕美・大槻 綾

1. 研究の目的

家族は、子どもが発達していくうえで、もっとも身近で直接的な、重要な社会的文脈の場である。現代の日本では、晩婚化、少子化、核家族化、離婚の増大（それに伴うひとり親の増加）、虐待・ネグレクトの急増などにより、子どもを取り巻く家族のあり方が大きく変貌しつつある。家族の形態や構造、機能が大きく変遷していくなかで、子どもは、家族という社会的文脈の中で、どのように発達していくのだろうか。また、子どもの健全な心理的発達を支える家族のあり方とはどういったものなのだろうか。

本研究では、子どもにとってもっとも身近で重要な育ちの場である家族という社会的文脈から子どもの発達を検討し、さらには子どもの健やかな発達を支える家族のあり方について、発達心理学の立場から検討していきたいと考える。特に、子どもの社会情緒的側面に関わる発達や問題（アタッチメント、仲間関係、対人行動、非行・反社会的行動など）を中心に、インタビューや観察、質問紙を用いて、家族という視点から子どもの発達を検討したいと考える。

2. 研究の成果

家族と子どもの発達をテーマに、各メンバーが自身の関心領域に従って、具体的な研究テーマ・目的を設定し、各自でインタビュー・観察・質問紙による調査活動を行った。以下、各メンバーの調査活動の結果について報告することとする。

（1）家族の情緒的雰囲気と子どものアタッチメントとの関連性

報告者：本島 優子

<問題と目的>

従来、子どものアタッチメントの性質を予測する要因として、養育者の子どもへの関わり方、特に子どもの欲求やシグナルを的確に読み取り、適切に応答する“敏感性（Sensitivity）”の重要性が指摘されてきた（e.g., Pederson, Moran, Sitko, Campbell,

Ghesquire, & Acton, 1990)。しかし、実際には、母親の敏感性と子どものアタッチメントの関連性は中程度に過ぎず、敏感性は子どものアタッチメントを予測する重要な要因の一つではあるが、唯一の決定因ではないことが近年のメタ分析の結果、明らかとなっている (De Wolff & van IJzendoorn, 1997)。そのため、養育者の個人的特性のみならず、養育者及び子どもを取り巻く社会文脈的要因をも含めて、子どものアタッチメントへの影響プロセスを検討する必要がある。例えば、重要な社会文脈的要因の一つとして、家族内の情緒的なやりとりの質や雰囲気、子どもの発達に促進的もしくは阻害的に働く可能性が考えられる (遠藤・田中、2005)。実際、争いや葛藤の雰囲気のなかで育てられた子どもは、さまざまな心理的問題を引き起こす可能性が高いと言われている (Schaffer, 1998)。そのため、家族の雰囲気が調和的で温かいものか、それとも葛藤や不和に満ちたものであるかによって、子どものアタッチメントの発達にも何らかの影響を与えるのではないかと考えられる。そこで、本研究では、家族の情緒的雰囲気が子どものアタッチメントの安定性にどのように関連するのか、検討を行うこととする。

<方法>

① 協力者

親子関係の縦断研究に協力して頂いている母親 35 人とその子ども 37 人 (うち、2 ケース双生児)。

② 手続き

生後 9 ヶ月に家庭訪問し、母親に家族の情緒的雰囲気に関する質問紙に回答してもらった。再度、生後 18 ヶ月に家庭訪問し、約 2 時間程度の行動観察に基づいて、子どものアタッチメント安定性を測定した。

③測度

*** 家族の情緒的雰囲気** : Cassidy が作成した家族の情緒的雰囲気に関する 20 の質問項目を日本語に翻訳したものを使用した。20 項目はポジティブな家族雰囲気とネガティブな家族雰囲気の 2 次元から成り (それぞれ 10 項目ずつ)、各次元ごとに加算値を算出した。

*** 子どものアタッチメント安定性** : Waters(1995)のアタッチメント Q ソート法(AQS)を使用し、約 2 時間の母子相互作用観察に基づいて、90 枚のカードを分類し、標準的な分析手続きに従って(Waters, 1995)、アタッチメント安定性得点を算出した。得点はおよそ-1.00~1.00 の間をとり、得点が 1.00 に近づくほど、アタッチメント安定性が高いことを示す。

<結果>

子どものアタッチメント安定性得点 (AQS) 及び家族のポジティブ雰囲気・ネガティブ雰囲気・ポジティブ雰囲気とネガティブ雰囲気の得点差について、それぞれ平均値と標準偏差を Table 1 に示す。

次に、生後 9 ヶ月の母親の家族の情緒的雰囲気の評定と生後 18 ヶ月の子どものアタ

アタッチメント安定性の評定が共に得られた母子 32 組のケースを対象に、家族の情緒的雰囲気と子どものアタッチメント安定性との関連性について、ピアソンの相関分析を行った (Table2)。結果、生後 9 ヶ月のときに母親が評定した家族の情緒的雰囲気と後の生後 18 ヶ月の子どものアタッチメント安定性との有意な相関関係は認められなかった。

Table1 各変数の平均値と標準偏差

	N	平均値	SD
アタッチメント安定性得点	36	0.43	0.30
ポジティブな家族雰囲気	35	61.09	7.04
ネガティブな家族雰囲気	35	33.64	9.20
ポジーネガ得点差	35	27.63	13.82

Table2 家族の情緒的雰囲気と子どものアタッチメント安定性 (AQS) との相関

N=32	AQS 得点
ポジティブな家族雰囲気	0.08
ネガティブな家族雰囲気	-0.17
ポジーネガ得点差	0.11

<考察>

本研究では、生後 9 ヶ月における家族の情緒的雰囲気と生後 18 ヶ月における子どものアタッチメントとの関連性を検討した結果、有意な関連性は認められなかった。直接的な子どものアタッチメントへの影響は認められなかったものの、おそらく、家族内の情緒的な雰囲気は、養育者の子どもへの関わり方に影響を及ぼし、そのことがひいては子どもの発達に影響を及ぼすのではないかと考えられる。家族内の情緒的雰囲気や夫婦関係、ソーシャルサポートといった社会文脈的要因は、子どものアタッチメントに直接的に作用するというよりは、媒介要因もしくは調整要因として間接的な作用を発揮しやすいという (数井、2005)。今後は、家族の情緒的雰囲気が、母親の子どもへの関わり方にどのように影響し、それが子どものアタッチメントとどのように関連するのか、より包括的な影響プロセスを検討する必要があるだろう。

(2) 青年期の関係性に応じたコミュニケーションスタイル

報告者：石井 佑可子

本研究では、青年期の問題の一つに挙げられる非行への傾斜を取り上げ、非行少年における対人関係行動の特徴を同じ青年期の対照群と比較検討した調査結果を報告する。ここでは対人関係行動の指標として社会的スキルを取り上げ、その際に特にそのスキルを「誰に対して行うのか」を設定し、相手との関係性に伴ってそれぞれどのような特徴を呈するのかに焦点を当てた。また、社会的スキルには単に自らの意見を主張するコミュニケーションスタイル(表出スキル)だけではなく、相手に自分の意図を伝えない、回避や欺瞞を含むコミュニケーション(非表出スキルとする)も含めた。結果を通して、青年期の非行傾向に家族を初めとする近しい他者がどのように対処するべきなのか考察したい。

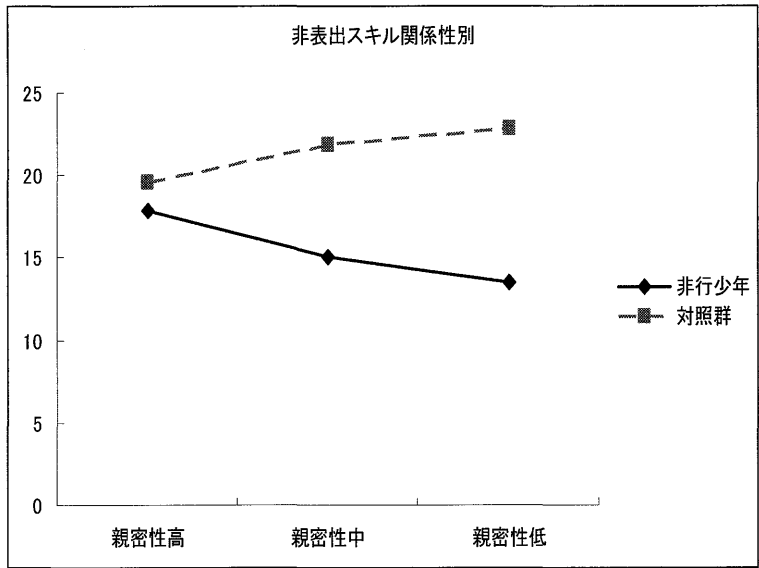
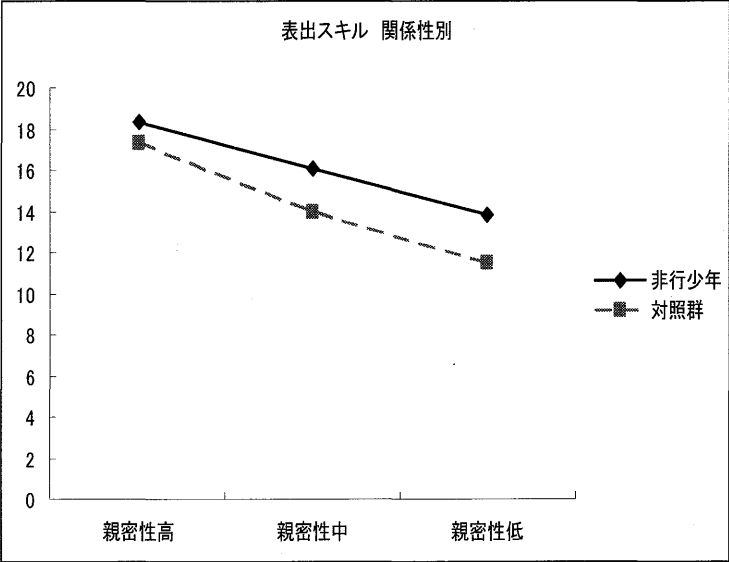
<方法>

調査参加者…①非行少年群；70 名(男性 51 名、女性 19 名、平均年齢 17.34 歳)②対照群；近畿圏の公立高等学校 2 年生 4 学級 150 名(男子 74 名、女子 76 名、平均年齢 16.9 歳)

質問紙…表出・非表出スキル尺度;社会的スキルを測るもの。従来の所謂ポジティブな行動を表出するスキルだけではなく、心情をあえて表出しないスキルも含めた尺度。それぞれのスキルを相手との関係性（高・中・低）ごとにどの程度行使するかについて問う尺度。それぞれの項目に対して、「親密性が高い人(友人、恋人、家族など)」・「中くらいの親密性の人(サークル・バイトで関わる仲間)」・「親密性が低い人（初対面の人や苦手な人など）」が相手だった場合の3通りに対してその行動を行う度合いを4件法で尋ねた。

＜結果＞

それぞれの群において表出スキル・非表出スキル得点について一要因 3 水準(親密性高・中・低)の分散分析を行った結果、全てにおいて親密性の主効果が認められた。①非行少年群では、表出スキル($F(2.138)=85.04$, $p<.001$)において、高>中>低で有意差が認められた($p<.001$)。また、非表出スキルにおいて ($F(2.138)=90.43$, $p<.001$) も、高>中>低の順に有意な差が認められた($p<.001$)。②対照群では、表出スキル($F(2.446)=617.35$, $p<.001$)において、高>中>低で有意差が認められた($p<.001$)。非表出



スキル($F(2.446)=458.22$, $p<.001$)においては、低>中>高で有意差が認められた($p<.001$)。

＜考察＞

表出スキルについては非行少年群と対照群とで関係性の変化に応じたスキル行使傾向が類似していた。一方で非表出スキルに関しては親密性が下がるにつれて対照群では非表出スキルの行使頻度が上がるのに対し

て、非行少年群では反対にスキル行使が減少するという結果が得られた。非行少年の対人関係の特徴には、「逸脱した友人」の存在が指摘されており、逸脱した友人が身近に存在した

場合、同調して自らも非行に関わってしまうことがあると考えられている。今回の、彼らが親密性の低い相手(初対面や関わりの薄い人)に対して自らの心情を表出することが多く、回避や欺瞞傾向が少ないと示した結果は、彼らの、詳しく知らない人物への警戒心の低さを示すものかも知れず、それ故に犯罪に巻き込まれることも想定できるのではないか。現実に総務庁青年対策本部の少年鑑別所に在所している少年と一般少年を対象に行った調査では非行少年群の対人関係について、一般の少年に比して異年齢の友達が多く、つきあっている人に関しては「異性の友達」「親に合わせたくない人」との答えが多いこと、親しい友人を得たきっかけについては「街で知り合った友達」への回答が非行少年で特に多かったことが指摘されている。今後、「逸脱した他者」として、単に同年代の友人だけではなく年齢層・性別共に幅広い相手を念頭においておく必要がある。家族などの親密性の高い相手に対しては非行少年と対照群とで大きな違いがみとめられなかったことから、家庭環境において単に親子間の直接のコミュニケーションを改善するというよりもむしろ、少年達が家庭外で独自で結んでくる関わりに敏感であること・また、相手によっては心情を積極的に吐露しない対人関係行動が有用であることを示す重要性が伺える。今回の調査では「近しい関係」として家族・友人・恋人などを包括して扱ったが家族、中でも親やきょうだいを独立して取り上げてかかわりを検討することで、非行傾向への対処の道筋が明確にされるかもしれない。

(3) 乳児のコミュニケーション発達を導く母親

― 母親の情動読み取り特徴に着目して ―

報告者：川崎裕美

<母親と乳児のコミュニケーションにおける情動の読み取り>

生後初期の乳児と母親の間では、さまざまな非言語的交流が行われているが、両者の間で情動状態を共有していることは非常に重要な意味をもっている。乳児期においては、母親と情動状態が共有されることで乳児自身の情動もみずから明確化され、乳児は自分の情動は共有されうるものなのだという感覚をもてる(遠藤、1995)。また、情動の共有は母子間の信頼感、親密感、交流への動機づけといった意味も含んでおり、乳児のコミュニケーション発達に大きな影響を与えるといえる。

言語を操れない乳児と情動を共有するためには母親による情動の読み取りが不可欠であるが、その読み取りは乳児の生得的な気質に影響を受けることが予想される。本研究では、乳児の気質と母親による情動読み取り特徴の一側面との関連を検討した。

<調査方法>

①調査協力者

事前に電話で承諾を得た、近畿在住の生後12ヵ月児(男児18名、女児17名)とその母親35名に調査を依頼した。母親の平均年齢は32.5歳、子どもの月齢平均は12ヵ月1.8日であった。

②母親の情動知覚傾向の測定

母親の情動知覚傾向を測定するツールとして、情緒応答性を測定する目的で作成された IFEEL Pictures(*Infant Facial Expression of Emotion from Looking at Pictures*)を井上ほか(1989)が日本人向けに改良した JIFP(日本版 IFEEL Pictures)を使用した。30枚の乳幼児の表情写真を通して、母親が乳幼児の感情をどのように読み取るかを把握するツールである。なかでも今回は、回答の中で乳児の発声並びに発言内容や思考内容を記述した「セリフ回答」の数を取り上げた。

③子どもの気質の測定

子どもの気質調査のために作られた、1～3歳児向けの日本語版 TTS(*Toddler Temperament Scale*)を母親に渡し、回答を求めた。回答は子どもの行動特徴を表す質問文に対してそれぞれ6段階で評定するものであり、97ある質問項目はそれぞれ「活動性」・「規則性」・「接近性」・「順応性」・「反応の強さ」・「気分の質」・「固執性」・「散漫性」・「敏感性」から成る9つの気質カテゴリーに分類されている。得点が高いほど、気質が扱いにくいとされる。

<結果と考察>

乳児の各気質カテゴリーの平均得点と IFEEL Pictures における母親のセリフ回答数とのピアソンの相関係数を求めた。結果は下表の通りである。

Table1 子どもの気質と母親のセリフ回答数との相関 (N=35)

子の気質	活動性	規則性	接近性	順応性	反応の強さ	気分の質	固執性	散漫性	敏感性
セリフ回答数	0.24	0.43*	0.08	0.01	0.34*	0.28+	0.26	0.13	0.21

*p<.05 +p<.11

各気質カテゴリーのうち、規則性・反応の強さとセリフ回答数の間に正の相関(p<.05)が見られた。また、気分の質とセリフ回答数の間にもやや正の相関傾向が見られた(p<.11)。他のカテゴリーでは有意な結果は得られなかったが、全体として気質の扱いにくい子どもの母親ほど、子どもになりきって子どもの発言内容や思考内容を描写したセリフ回答を示しやすいことがうかがえた。

今回の調査では、母親の情動読み取り特徴のうちセリフ回答数という一側面のみを取り上げ乳児の気質による影響を検討したが、さらに詳細に母親の情動読み取り特徴を検討することで母子間の情動共有を促進しコミュニケーションを豊かにする要因にせまれると思われる。

(4) 母子関係にみる就学前児の自己理解

報告者：大槻 綾

<問題と目的>

子どもにとっての最も意味ある他者とは母親であるとの指摘 (Rosenberg, 1979 など) に準えつつ、基本的信頼が形成される乳児期を経てもなお母親と一緒に過ごす時間

が長い就学前児の生活環境をも鑑みたならば、母親の存在は子どもの自己理解を大きく左右する要因と考えられる。そこで、「母親の存在は、子どもの自己表象にどのような影響をもたらすのか」という点に着眼し、母親と一緒にいる時・いない時の自己描写を就学前児から引き出してみる。

<方法>

〇 県内の幼稚園に在籍する年長児 37 名(男児 25 名、女児 12 名)を対象にインタビュー調査を行い、母親という時・いない時双方の自己について、4つの観点「定義」「総合的評価」「肯定的感情」「否定的感情」から描写してもらった。

<結果>

母親という時・いない時の「定義」「総合的評価」「肯定的感情」「否定的感情」の描写内容に変化が見られるか、描写内容を直接比較した。変化があった場合は「変化あり」と判定し、変化がなかった場合は「変化なし」と判定した。さらに、どちらにおいても「わからない」と回答した場合は、自己を表象するにいたっていない状態と判定した。これらを3つに群分けした後、「定義」「総合的評価」「肯定的感情」「否定的感情」各々に、有意水準 5%で対応のある χ^2 検定を行った。Table 1 に、各群の人数および残差を示す。

結果、定義($\chi^2(2)=28.757$)、総合的評価($\chi^2(2)=26.000$)、肯定的感情($\chi^2(2)=26.811$)、否定的感情($\chi^2(2)=14.973$)のいずれにおいても有意な差が見られた。だが、否定的感情については相対的に変化が見られなかった。

続いて、佐久間(2006)の分類枠を参考にしつつ、自己描写内容を Table 2 に沿ってカテゴリ化し、上位カテゴリのみ得点化した。得点の

Table 1 母親という時・いない時の自己描写の変化

	定義	総合的評価	肯定的感情	否定的感情
変化あり	27 (14.7)	26 (13.7)	27 (14.7)	21 (8.7)
変化なし	1 (-11.3)	1 (-11.3)	3 (-9.3)	14 (1.7)
わからない	9 (-3.3)	10 (-2.3)	7 (-5.3)	2 (-10.3)

Table 2 自己描写内容カテゴリ一覧

上位カテゴリ	下位カテゴリ	具体例
身体的・外的属性	1. 具体的特徴	名前・顔・髪型・特定場所
	2. 抽象的特徴	体が小さい・細い・かわいい
行動	1. 出来事	迷子になった・怪我をした
	2. 活動	走る・遊ぶ・テレビを見る
	3. 外向的行動	よくしゃべる・黙っている
	4. 協調的行動	仲良くする・喧嘩する
	5. 勤勉的行動	お手伝いをする・勉強する
	6. 能力評価を含む行動	走るのが速い・字が読める
人格特性	1. 外向性	明るい・元気・おもしろい
	2. 協調性	やさしい・親切・素直
	3. 勤勉性	頑張り屋・真面目
	4. 全般的評価語	いい子・普通・賢い
母親からの直接的言動	1. 情緒的つながり	抱きしめてくれる・手をつなぐ
	2. 評価	お母さんに賢い/悪いと言われる
	3. 賞罰	お母さんに怒られる・褒められる
他者からの直接的言動	1. 情緒的つながり	他者がやさしくしてくれる
	2. 評価	他者に賢い/悪いと言われる
	3. 賞罰	他者に怒られる・褒められる
無		ない
無回答		わからない

方法として、まずどのカテゴリに言及しているかを判定した。その上で、言及している場合は1点、言及していない場合は0点とした。例えば、母親という時の定義と肯定的感情に「行動」についての言及があり、総合的評価に「人格」、否定的感情に「母親」についての言及があった場合、行動得点が2点、人格得点が1点、母親得点が1点と換算した。

そして得点化後、母親という時・いない時の描写内容に違いがあるのか、言及得点に関して、有意水準5%で対

		Table 3 上位カテゴリ言及得点の平均値と標準偏差						
		身体	行動	人格	母親	他者	無	無回答
母親という時・いない時の描写内容に違いがあるのか、言及得点に関して、有意水準5%で対	いる時	0.14 (0.42)	0.54 (0.87)	0.32 (0.63)	0.54 (0.65)	0.11 (0.32)	0.70 (0.66)	1.65 (1.18)
	いない時	0.27 (0.51)	0.92 (0.89)	0.46 (0.56)	0.05 (0.23)	0.24 (0.50)	0.81 (0.74)	1.24 (1.07)

応のある t 検定を行った。各平均値と標準偏差は、Table3 のとおりである。

結果、身体(t(36)=-1.961)、行動(t(36)=-1.979)、人格(t(36)=-1.221)、母親(t(36)=4.548、他人(t(36)=-1.535)、無(t(36)=-1.000)、無回答(t(36)=-2.661)のうち、母親と無回答に有意な差が見られた。これは、母親と一緒にいる時の自己描写はいない時に比べ、母親についての言及と無回答が多くなったということである。さらに、今回は、有意差が見られた母親のみの下位カテゴリに着目したところ、母親と一緒にいない時では、いる時に比べ、情緒的つながりの言及は多くなるが、賞罰の言及は少なくなるといった特徴も見られた。

<考察>

最も意味ある他者である母親と一緒にいる時・いない時では、子どもの自己表象は大きく変化する。ただ、否定的感情についての変化が相対的に小さいのは、「自分の嫌いなところはない」と回答した子どもが多かったためであり、これは就学前児に特徴的な非常に肯定的な自己評価が反映したものと考えられる。

さらに、母親といない時に比べ、いる時の方が、母親についての言及と無回答が多くなったという結果については、次のように考えられる。母親と一緒にいる時だからこそ、母親についての回答が多くなった傾向には勿論のこと、無回答が多くなった結果にも、母親との強固な結びつきを伺うことができる。母親と一緒にいると自己をうまく表象できないというのは、一緒にいる時の自己はごく自然のものであり、改めて表象するに至らないのではないか。母親が愛着の対象として絶対的な存在だと言えるのかもしれない。

3. 総括と今後の課題

本研究では、子どもにとってもっとも身近で重要な育ちの場である家族という社会的文脈の視点から、特に子どもの社会情緒的発達や問題を中心に、インタビューや観察、質問紙を用いて、子どもの発達を検討してきた。

まず、本島は、家庭内の情緒的なやりとりや雰囲気の本質が子どものアタッチメントの

安定性にどのように影響するのかについて検討を行った。生後 9 ヶ月に家族の情緒的雰囲気について母親に質問紙での評定を求め、生後 18 ヶ月に観察を通して子どものアタッチメント安定性を測定し、両者の関連性について検討したところ、有意な関連性は認められなかった。直接的な子どものアタッチメントへの影響は認められなかったものの、家族の情緒的な雰囲気は、母親の養育行動に影響を与え、ひいては子どもの発達に影響を及ぼす可能性が考えられ、今後は、母親の養育行動も含めた媒介的な影響プロセスの可能性について検討を行うことが必要であろう。

次に、石井は、非行少年の対人関係行動、特に社会的スキルの特徴について検討するため、非行少年を対象に質問紙調査を行った。結果、非表出スキル（相手に自分の意図を伝えない、回避や欺瞞を含むコミュニケーションスタイル）の行使において、対照群（高校生）は相手との関係の親密性が低くなるにつれて、行使頻度が高まるのに対して、非行少年は、相手との関係の親密性が低くなるにつれて、行使頻度が少なくなるという結果が得られた。非行少年が「街で知り合った友達」と簡単に親しくなってしまうたり、「逸脱した友人」が身近に存在した場合、同調して自らも非行に関わってしまいやすかったりするのとは、こうした非行少年の特異的な対人関係行動の特徴が背景にあるのではないかと考えられる。

次に、川崎は、子どもの気質が母親の情動の読み取りにどのように影響するのかについて検討を行った。12 ヶ月の子どもを持つ母親を対象に、子どもの気質について質問紙での評定を求め、さらに IFEEEL Pictures 日本版を用いて、乳児写真に対する乳児の情動の読み取りを求め、母親の乳児の発声・発言・思考に言及した「セリフ回答数」を測定した。子どもの気質と母親のセリフ回答数との関連性を検討した結果、気質が扱いにくい（特に、食事・睡眠等の周期性が不規則で、反応が強く、気分の質が悪い）子どもの母親ほど、乳児写真に対して、乳児の発声や発言・思考に言及したセリフ反応数がより多かった。

最後に、大槻は、子どもにとっても最も意味ある他者である母親が子どもの自己表象の発達にどのように影響するのかについて検討を行った。年長児を対象に、インタビューで母親といるときとしないときの自己について描写を求めた結果、母親といるときと自己と母親としないときの自己では描写が異なり、変化が認められた。このことから、母親の存在は子どもの自己理解に影響を与え、自己表象の発達に影響を及ぼす一つの重要な要因となるのではないかと考えられる。

以上、本研究では、各メンバーが自身の関心領域に従って研究テーマを設定し、各々の調査結果に基づき、家族と子どもの発達について実証的検討を試みてきた。しかし、今回は、個別の研究結果を超えたより包括的な議論・考察までには至らず、家族が子どもの発達にどのように影響するのか、さらには子どもの健全な心理的発達を支える家族のあり方とはどういったものかについて、必ずしも十分な統括的な研究知見を示すことができなかった。より有用な実証的知見を得るには、さらなる時間や労力、資金が必要

となる。今後は、より実践的で有用な知見を提供するために、複数の調査テーマをさらに絞り込み、より重層的に多角的に、家族と子どもの発達について、さらに研究を発展させていくことが必要である。

文献

< 2 節 1 項 >

De Wolff, M.S. & van IJzendoorn, M.H. (1997). Sensitivity and attachment: A meta analysis on parental antecedents of infant attachment.

数井みゆき・遠藤利彦 (編) (2005). アタッチメント：生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房.

Pedreson, D.R., Moran, G., Sitko, C., Campbell, K., Ghesquire, K., & Acton, H. (1990). Maternal sensitivity and the security of infant-mother attachment: A Q-sort Study. *Child Development*, 61, 1974-1983.

Schaffer, H.R. (2001). 子どもの養育に心理学がいえること (無藤隆・佐藤恵理子, 新曜社 (Schaffer, R. (1998). Making Decisions about children. England: Blackwell.)).

Waters, E. (1995). The Attachment Q-Set. In E. Waters, B.E. Vaughn, G. Posada, & K. Kondo-Ikemura (Eds.), Caregiving, cultural, and cognitive perspectives on secure-base behavior and working models. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 60(2-3, serial No. 2449), 247-254.

< 2 節 3 項 >

遠藤利彦. (1995). 乳幼児期における情動の発達とはたらき. 麻生 武・内田伸子編. 人生への旅立ち—胎児・乳児・幼児前期(講座生涯発達心理学 2). 金子書房.

井上カーレン果子・浜田庸子・深津千賀子・滝口俊子・小此木啓吾. (1989). Japanese I Feel Picture Test 標準化の過程(第 2 報). 安田生命社会事業団研究助成論文集(健全育成関連分野), 25, 13-18.

小原倫子. (2005). 母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感との関連. *発達心理学研究*, 16(1), 92-102.

William Fullard, Sean C. McDevitt, William B. Carey. (1978). Toddler Temperament Scale. 佐藤俊昭・古田倭文男(訳). (1982). 東北大学. 1

< 2 節 4 項 >

Rosenberg, M. (1979). *Conceiving the self*. New York : Basic Books.

佐久間 (保崎) 路子. (2000). 幼児・児童期における自己理解の発達：内容的側面と評価的側面に着目して. *発達心理学研究*, 第 11 巻, 第 3 号, 176-187.

佐久間路子. (2006). 幼児期から青年期にかけての关系的自己の発達 風間書房.

謝辞

本研究の調査にご協力いただいた協力者の皆さんに心より感謝申し上げます。